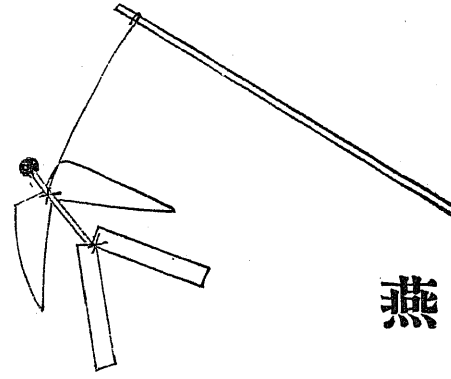
燕の玩具

東京女子高等師範學校附屬幼稚園保姆　はる子



大嵐の二日後。空美しく晴れ渡つて何ともいへぬいゝ心持のする朝でした。頭も髪も銀のやうに美しく、そしていかにも平和な人相をした、身なりの立派なお爺さんが、面白い燕の玩具を竹の先につるして、ぐる〳〵廻しながら、田圃の方からやつて來て四角(ヨツカド)の所に來かゝりまして。例の椎の木の下に立ち止まつて「どちらに行かうか」と考へる樣子。

椎の木の前の母の家へと行きかけて丁度そこへ來た私は突然聞きました。

「それは賣るんですか。」

返事がありません。しかしにこ〳〵して私を見てゐます。

「それは賣るんですか。」

なほ返事がありません。そして曰く。

「私はどうも、これが(耳に手をあてゝ)聞えませんでな。」

ほんとに察しが惡かつたと思ひながら、恥しいやうな大きな聲をはり上げて前の問を繰りかへしました。

「えゝえ賣ります。」

「いくら?。」

「二錢でございます。」

「赤いのを上げませうか、黑いのを上げませうか」

「赤いの頂戴。」

はい〳〵、いゝのを見て上げませう。」
持つて居る幾つかの中から、なるべく具合のいいのを探して居ります。私はその間に門の内にかけこんで母を呼びました。
「おもしろいお爺さんが來たからいらつしやい。」
「おや〳〵。」
と云つて母が出て來ました。つゞいて父も出て來ました。
「これはおもしろい私が買つてやらう。」
父が二錢の銅貨と交換してお爺さんの選んでくれた赤い燕を持つて家にはいりました。
「さやうなら。」
とお爺さんが壞れた垣根の横を行きかけた時。
「もう一つ頂戴。」
と私は思ひ出したやうに叫びました。我ながらその聲の大きかつたのに驚きました。
「はい〳〵また赤いのを上げませう。お小い方は赤いのに限ります。私は、な、今年は八十八歳になります。この通りの白髪です。それでな。記念にこれを作りました。この繪具丈でも二錢はかゝります。まうけ等は少しもないんですがね。お子さん達を喜ばして上げやうと思つて、かうして少しづゝ作つては持つて賣つて歩きます。」
「まあ。」
「この繪具はな、五年前に買つて置きました。その時は一斤一圓二十錢でしたがね。今ではもう十四圓ださうです。たつた五年の間に、十三圓あがりました。ハハーおどろきますな。」
「おや〳〵まあ。」
と云ひながら、今度は私が壞れた垣根ごしに受取りました。
「どうもありがたう。」
とお爺さんは向うに行つてしまひました。
私は一つをうちの赤坊において、一つを持つて幼稚園にと急ぎました。あのお爺さんの平和な顏と味のある言葉は、いつまでも〳〵私の心の中を占領して居りました。

○燕のおもちやの作り方。

先づ次のやうな材料をとゝのへます。

一、翼の紙……畫用紙位の厚さのもの。

二、尾の紙……畫用紙にあつい半紙でうらうちをした位の厚さのもの。翼も尾も色は任意です。配合よくえらぶときれいです。

三、短い竹……筆の柄位のなるべく穴の太い竹を一寸二分位にきつたもの。(但寸法は凡てかねざしとす)

四、太いヒゴ……三寸位の長さ。

五、黑豆或はむくろじの實。頭にするもの。えん豆を黑く塗つてもよろし。

六、少量の粘土…腹につけるもの。

七、糸……普通の木綿縫糸にてよろし。翼や尾を縫ひつけたり竹につるしたりする時つかうもの。

八、竹……二尺位の細竹。

最初に翼と尾をきりぬきます。翼は こんな形です向ひ合せにして二枚剪ります長さは凡そ三寸、幅(最もひろい所で)は一寸二分位です。尾は こんな形です。長さは矢張三寸幅は七分位です。

剪りましたら翼は この圖のやうに縫ひ合せてその糸で短い竹(材料番號三)に縫ひつげます。尾も亦 かうして縫ひ合せてヒゴの一端に縫ひつけます。此のヒゴを翼を縫ひつけた竹に通してその先に頭をつけます此の翼や尾はなるべくひろげて縫ひ合せるとよくまはります。

次に腹になる部分(短い竹)に粘土をつけます。この粘土のつけ方が大變大事です。その重さがこの玩具がよくまはるや否やに最も深い關係を持ちますから。それはなれて來ますと手加減でよくわかりますが、はじめはまはして見ては訂正を加へる他ありません。まあほんの少しつける丈です。